

(「研究する」2023年7月)

「私が研究する理由(4) ～つなぐ～」

これまでの3回のコラムで、「研究とは、未知の世界を拓く活動(第1回)」「学校に体する実践者と研究者との関わり方(第2回)」「主観とエビデンス(客観)から実態を見とる重要性(第3回)」についてお伝えしてきました。最後は、私の社会人としてのテーマでもある「つなぐ」です。

突然ですが、私の生き方の話をします。キャリア教育学会なので許してください。学生時代を終え、社会人生活も20年目になりました。10年くらい前から少しずつ意識的に気づいてきたことがあります。それは、自分の社会人としての生き方には共通のテーマがある、ということです。みなさんにはありますか？わたしの社会人としてのテーマは「つなぐこと」です。

教員5年目に特別活動主任として生徒会活動を生徒とともに推進してきました。そこ見られたのは、教師の指示で子どもが動くのではなく、生徒自身が自分たちで組織を運営し、より楽しい学校生活を目指して協働する姿でした。

その後、異動した赴任先では国研の「魅力ある学校づくり調査研究事業」に参加し、誰もが学校生活を楽しみ、不登校を減らすために中学校区で小学校との交流を図り、「絆づくり/居場所づくり」を推進する、異年齢交流(小中連携)を実践しました。そこでは、小中の先生同士の協働も見られ、部活動で一度も選手になれない生徒、学習やスポーツが苦手な生徒でも、活躍の危害があり、小学生が中学生に憧れを抱いたり、小学生を未来の後輩としてあたたかく接したりする姿が見られました(この子どもの変容する姿を見て、「研究」の効果と重要性を再認識し、学会への参加が始まりました)。

そして、異年齢の交流が特別活動だけでなく、人の生き方を支える大きな役割を担っていると実感し、キャリア教育の重要な柱として、社会人につながる縦の異年齢交流と、地域・社会とつながる横の異年齢交流、この2つの実践と研究に取り組んでいます。本学会に入会したのもそのような経緯からくるものです。

このようにふと気づいたのは、「人と人をつなぐ」実践にずっと取り組んでいることに気づきました。人と人が協働することで社会を形成する、その人材を育てるのが教育ですから、当然のことをしているだけなのかもしれませんが…。

そして今は、この実践を「実践研究」として、研究者とつなぐ取組をしています。私自身の「研究への憧れ」も特別活動やキャリア教育へとつなぎ、自分自身の社会人としての活動のすべてが、こうした「つなぐ」ことに帰結しています。

教育も社会も、研究も同じように、一人の力ではたどり着かない世界が広がっています。一人一人の持っている願いや思いを実現する力を持ち寄って「つながる」ことで社会は変わっていくと思います。「研究」はその重要な要です。

知的好奇心で始まった私の「研究」への思いは、今も新しい考え方を繋ぎながら広がっています。最後までお付き合いいただきありがとうございました。

(愛知県みよし市立三好中学校 村瀬悟)